

JACC各支部・自然保護活動の報告

二〇一一年六月十一日(土)午前、西鉄イン福岡のAホールを会場に、「日本山岳会各支部・自然保護活動の報告」が行われた。年に一回、全国自然保護委員(広島支部は自然環境委員)が一堂に会して各支部の一年間の活動を報告することにより、日本の山岳地域が抱える自然保護問題の現状や課題を共有し、今後の活動のあり方をめぐって相互に刺激し合う貴重な機会である。今年度は大震災による東北地方の深刻な被害により開催が危ぶまれたが、全国三十支部のうち二十支部からのご参加をいただき、充実した情報交換と討議の場となった。特に、地震・津波・原発事故の三重苦を抱えて大変な状況の中、はるばる福岡まで駆けつけてくださった福島支部自然保護委員長の高田雅雄氏からは、大震災三ヶ月後の福島県の厳しい現実と、そうした中で活動への取り組みについてご報告をいただき、感謝の気持ちでいっぱいである。今回も、昨年に継ぐ二度目の試みとして、全国集会初日朝から参加された支部代表者全員から年間活動状況をご報告いただいたので、その概要を紹介したい(以下、発表順・敬称略)。

発足二年目は四つの活動を柱に

埼玉支部(北原秀介) 昨年四月に三十番目の支部として設立され、自然保護委員会の委員には二十数名が登録しているが、委員会活動に参加しているのは十名前後である。昨年六月に活動を開始し、一年間は委員だけで試行錯誤であったが、二十三年度から具体的な行動に移ろうということで取り組んできた。昨年度は、地質がおもしろく、絶滅危惧種もあるということで、大高取山で勉強会を行った。また、埼玉県には森林サポータークラブ

というのがあり、森林公社や林野庁の方々にお問い合わせして植林の維持管理のお手伝いをさせていただいております。下枝払い等の活動を行った。いよいよ今年度から、埼玉支部として、具体的に活動を開始することになっている。今年度は四つの活動をしうということである。①自然保護シンポジウム(九月開催)、②自然観察会(学校等と呼びかけて一般公募で実施)、③森づくり活動(埼玉森林サポータークラブに所属して具体的に行動開始)、④シカ被害の実態調査(五月に両神山・二子山の麓で調査

を開始)、を計画している。

④については、埼玉県の自治体としては調査していないが、相当なシカ被害が見られ、ササが全部食べられ枯れているのを確認してきた。来年は報告できると思う。

山岳トイレの補助事業を復活

信濃支部(穂苅康治) 上高地ロープウェイの設置反対運動、上高地ダム建設反対運動、山岳地域大型風力発電の反対運動などの大きな節目で信濃支部は、その役割を果たしてきたが、日常的な自然保護活動は、現在おこなっていない。

昨年は、私が山小屋関係者である関係で、山岳トイレの補助事業の復活に取り組んだ。昨年六月の環境省事業レビューで山岳トイレの補助事業の打ち切りが決定されたことを受けて、環境副大臣と山岳関係者で復活に向けて協議を行い、山のエコーを中心に集会を二度ほど開催したほか、国立公園市長会、長野県町村会等の団体からの要望、地元議員への働きかけなどを通じて復活を要望し、結果的に前年度並みの予算が復活した。期間の限定、地域協議会の設立、受益者負担の徹底、市町村等の山岳トイレへの補助廃止等条件が付されたが、御岳などトイレ改善を予定していた山域では、大変喜ばれた。

また、「雷鳥会議」というのを雷鳥の生息地域の市町村が持ち回りで毎年一回開催しており、今年は七月二十三〜二十四日に松本市で行われる。シカの被害が高山域の植生にも及んで問題になっているが、北アルプスでもシカが見かけられるようになっており、シカ対策の早期実施に向けて準備を進めている。

岐阜県では今夏からシカの調査を開始

岐阜支部（西條好迪） 岐阜支部では、自然保護・科学・登山技術と合同で活動しており、私どもの取り組みには三つのポイントがある。

①登山道パトロール：中部森林管理局の岐阜森林管理署管内の国有林を中心に、植生の様子や倒木、登山道の維持管理、道標・案内板の維持状況等を、支部会員の山行時に調査し、報告する活動を行っている。

②私たち県民の森林づくり：薪炭林施業が放棄された後、三十〜四十年経過した落葉広葉樹二次林において、潜在自然植生であるブナ林の再生を目指した撫育施業を継続実施してきた（通算百二十八回、今年度も二十回予定）。植栽地の成長状況をモニタリングしながら、野生動植物の野外観察の場としても活用している。



③登山技術講座：従来の研修に、山行時におけるラ

ンドマークとしての植生・植物の変化や地質環境の移り変わり等への理解も研修項目に加えることで、会員の自然環境に関する資質向上に努める活動を開始した。

岐阜支部としてシカの問題については取り組んでいない。ただ、私の関わっている岐阜県状況について言うと、イノシシやクマの問題があり、これについては野生生物保護という観点から調査してきた。それが終わって、昨年、今年と、ニホンカモシカの密度調査を行い、若干減少傾向にあるという結果が出始めている。今年の夏からは、二、三カ年かけてニホンジカの調査が始まることになっている。

高山植生に対する被害に加え、山村地域の農作物を荒らしているということでニホンジカを密度コントロールしなければならぬ。そのために、岐阜県を中心として県境に至る、あるいは森林管理局をまたいだ形でシカの習性についてのデータをまとめ、それをもとに岐阜県としてどのような鳥獣保護の政策をとるのかを考えていく。岐阜支部としてはな



いが、支部会員の中には、いろいろな委員会に関わっている者があり、そういうところで活動しているというのが現状である。

森づくり運動に取り組む

宮崎支部（原崎治人） 宮崎支部では自然保護委員会を立ち上げ、大きな柱として森づくり運動に取り組み、年数回下草刈りを行っている。そのほか、森林管理署の依頼を受け登山道の点検とその結果報告を行っている。また、宮崎市の近郊に自然保護林があつて、毎年年末に清掃登山をやっている。

宮崎でもシカがたくさん出る。シカの問題については、何の対策もせずに見守っているだけのようだが、それでよいのだろうか。下草で降った雨を止められれば土壌を守るが、土の原っぱになっているために、シラス台地の南九州では土砂が流れ、渇水時期にはダムの底が見えてしまう。それくらい被害が大きい。それはシカの問題だと私は考えている。

「九重の自然を守る会」の会員として活動

東九州支部（加藤英彦） この四月の役員改選で支部長になった。自然保護については、二名の委員がいる。東九州のホームグラウンドである九重山群は、屋久島を除くと九州で一番高い山であるが、この六月のシーズンは

ミヤマキリシマが最高で、最近はかなり山が荒れてきている。崩壊が激しいため、登山ルート六カ所が入山禁止になった。我々独自の活動はしていないが、今年五十周年を迎える「九重の自然を守る会」というのがあって、そこで地道な活動をしながら、日本のラムサール条約登録湿地である九重のタデ原湿原や棒ガツルの自然を大切に保護している。そのグループで野焼きに取り組み、野焼きの復活により自然を取り戻した。我々の会員の中にも、「九重の自然を守る会」の会員がおり、そういった形で活動をやっている。

登山者の立場から自然保護を

北九州支部（日向祥剛） 北九州支部の特徴的なことは、①支部会員が森林保全巡視員の資格をもらって活動していることである（現在、四十名）。山に登る時に、いろいろなものを見てレポートを書き、林野庁の方に報告がいく形になっている。その他、②山道の整備を町から一部請け負ってすることもあるし、登る時に少しでも木や石をどける、あるいは手入れできるところは手入れするという風なことをしている。それから、③清掃登山を、英彦山などで定例的になるべく多くの方に呼びかけて行っている。

北九州支部の山域では、シカの害よりもイ

ノシシの害が大きい。シカはあまり目立たず、イノシシやサルの方が多い。あとは、温暖化に伴って、外来植物が入ってきている。トイレの問題では、福地山にバイオトイレを設置された方がいる他、英彦山にトイレを作るかという問題が起きたりしている。こういったことにも参加してやっていきたい。私どもは日本山岳会であり、山登りが主体であって、それに付随して自然保護という立場を忘れない、ということではないかと思う。

また、北九州支部では、英彦山に色々な問題があると提起してきたが、それに対して英彦山神社も一緒になって、羽黒三山、大峰山と並ぶ日本の三大修験道の山である英彦山をもう一度甦らせようということで、修験道の人々の祠や昔の訓練場所を復活させる動きが起きている。個人的な見解として、日本山岳会が海外遠征の時などに自然だけではなく文化も含めた形で総合的な情報を皆さんに提供していくのは、非常に重要なことだと考えている。そういった観点からも活動していきたい。

なお、北九州支部ができる前、福岡支部の時代に、屋久島が世界遺産に認定された翌年、日本山岳会の本部行事として屋久島に行って世界遺産を考えようという企画を福岡支部がして、その時に全国から百十数名の方が集まった。屋久杉ランドで、館長の稗田さんが中

心となって自然保護シンポジウムを開き、報道機関も入って少し話題になった。翌日、希望者百三名が宮之浦岳に全員登頂した。今後、登山者の立場から自然保護にどう関わるべきか、どう守っていくべきかを考えながら進んでいきたい。



山の日運動を提唱して十年目の広がり

広島支部（前垣寿男） 六月四日、五日に「ひろしま『山の日』県民の集い」を行った。初日は、記念講演を宮脇昭先生にいただいた。その後、神崎忠男氏、堂本暁子氏、鶴見武道氏、伊藤利彦氏、中越信和氏を迎えてパネル・ディスカッションを行った。二日目は、堂本暁子氏にお願いして龍王山のグラウンドで野外の講演会を行い、西条農業高等学校の全校生徒を含めて千百名の参加者に生物多様性の話をいただいた。その後、龍王山で山歩き、ゴミ拾い、山の手入れをやった。今日は、愛媛で四国四県が集まって山の日運動の大会をやっている。私どもが山の日運動を提唱して十年、多少、自然保護全国集会で話をさせていただきながら、JACとしても山の日を考えていこうという機運が出てきたの

はありがたいことと思っている。現在、山岳五団体がパンフレットを作って山の日運動に取り組んでいる。それぞれの団体でそれぞれの思いがあつてしかるべきだが、JACだけでできるものではない。山に興味のある者、そして行政、すべてを巻き込んだ形でこの運動を提唱していかなかったら、なかなかできない。一日でもよいから山を守ろうではないかという心持ちを国民一人ひとりが持つことが大事である。そのために、海の日があつて、なぜ山の日がないのかという話が、たまたま広島にJACの支部ができるのと時を同じくして出た。二〇〇二年二月に「第七回森林と市民を結ぶ全国の集い」の最終日に提起したのがきっかけとなつて、同年六月に「ひろしま『山の日』県民の集い」の第一回大会を東広島市で開催し、今年で十回目を迎えた。

全国集会では、いつも地方のお話を聞かせていただき、非常に参考になつている。この全国集会だけは、一人でも参加したい。

大山に特化した自然保護活動

山陰支部（伊澤寿高） 山陰支部は、鳥取県と島根県の支部だが、自然保護はほとんど大山に特化している。「ブナを育成する会」や「大山頂上トイレ汚泥キャリダウンボランティア」などがある。大山のトイレ問題だが、ト

イレは登山口と山頂にあり、両方とも水洗便所である。四年ほど前から山頂のトイレについて、汚泥を持つて降りようということ、

「頂上トイレ汚泥キャ

リダウンボランティア」を組織し、登山者が四リットルのペットボトルに汚泥を入れて下山をしている。約五百人が参加するので、一年間に約二立方メートルの汚泥を持つて降りることになる。山頂のトイレは、太陽光と風力発電でやつていて、汚泥はほとんど発生しないはずなのだが、いざ蓋を開けてみると、ナイロンとかビニールが多く入っていた。当初、これが何かよくわからなかったが、後に生理用品ということがわかつて、大変に驚いた経験がある。その後、大々的に宣伝した結果、大分減つたと考えている。引き続き、この活動を鳥取県、他の山岳会一丸となつて継続してやつていきたいと思つている。



本山寺山森林づくりの活動を体験中

関西支部（斧田一陽） 関西支部は、現在、大阪・兵庫・奈良・和歌山の四県と四国四県がエリアで活動しているが、四国四県については支部設立の準備に入っており、自然保護

関係でも応援することになつている。自然保護委員会は現在委員九名で活動している。関西支部では、今年から、一般の方を対象とした登山教室を実施しており、その内の自然保護について受け持っている。自然保護活動としては、次のようなことに取り組んでいる。

①本山寺山森林づくり：…去年の暮頃から支部の森林づくりのエリアを設けて活動をしようという動きがあつて、昨年度は全体調査活動を行った。今年度は、間伐、自然歩道整備などの体験林業活動をしている。支部員半分・一般半分か、支部員三分の一・一般三分の二の活動組織になればと思つている。生物多様性の向上を目的に国民参加の森林づくりを目指し、活動組織として「本山寺山の森林づくりの会」を結成準備中である。

②やまみち巡視保全活動：…自然歩道の巡視と簡単な保全活動を平成二十一年度からやつていて、今年度は大阪府茨城市制定の六本の自然歩道についてやり、この八月末で終了予定である。その後は、また、それ以外の自然歩道で実施していきたい。自然歩道沿いでは、不法投棄の問題や森林・竹藪が生い茂り展望がよい等、あまりよくない状態になつている。歩道自体の問題としては水が流れて川になることがあり、水切りをしつかりやれば表土が流れなくなるケースが多いので、そ

ちらの手直しをしている。片手鍬と鉋鎌があれば、歩きながら簡単な保全ができる。

③自然観察会：支部の山行委員会と共同で野生植物の観察会を行っている。

④東お多福山草原保全・再生活動（協働活動）：四団体協働による三年間のネザサ草原からススキ草原への復元化調査活動が終了した。行政も含めて複数の団体でやる協働参画事業は、自然保護活動の流れになる一つの例ではないかと思う。屋久島問題も、そういう形でやるとうまくいくのではないか。

⑤森の勉強会（東海・京都・関西各自然保護委員会共催）：持ち回りで通算十五回実施してきた。昨年度は関西支部が担当して西大台で開催し、今年は十月に東海支部担当で三重県尾鷲市の速水林業の森林で開催予定である。

⑥吉野熊野国立公園西大台地区利用適正化計画検討協議会：利用適正化計画の策定や変更の協議に関係団体として参画している。

自然保護関係団体の中での取り組み

富山支部（金尾誠一） 日本山岳会の支部の活動としてはあまり行われていないが、自然保護関係団体の中で取り組んでいる。富山県の「自然保護協会」の方には幹部として参加しているし、「富山雷鳥研究会」の方も、今年は十年ぶりに大々的な調査をやるとのこと

で、それに参加している。支部としては、これからも皆様方の活動を参考にしながら、どういう形でやっていくかということを提起させていたきたいと考えている。

ヤマシヤクヤクの保護からシカ問題へ

京都支部（酒井展弘） 昨年もお話させていただいたが、京都支部ではヤマシヤクヤクの保護をしようということで取り組みを始めた。その発端は、ある時、北山へ行ったら、突然、今まで見たことのないヤマシヤクヤクが二本ほど咲いていた。これは珍しいということ、保護するかどうかが問題になった。その次の年に行くと、五、六本に増えていた。これは、ちゃんと保護してやらなければならないということ、さらに次の年に行くと、同じ山城の斜面に群生していた。ヤマシヤクヤクを保護しようということで始めたが、実際にそれがどういうわけで咲き出したのかということに興味があつて、これをシカは食べないのでないかと思ひ、そういう目で山に行く時にいろいろ観察した。去年、名古屋で生物多様性の保全ということで会議が開かれたが、京都から滋賀県にかけての山は非常に生物が単純化してきている。生物多様性と全く反対の方向に進んでおり、山の稜線には十種類ほどのシカの忌避植物しか生えていない。草本の

主なものは、シダ類、イワカガミ、イワウチワ、コアジサイ、ハナヒリ、トリカブト、イヌワラビ、マムシグサ、アザミ、カラマツソウ、コバイケイソウ、エゴマといったものである。それで当初の保護という問題から、シカの食害の問題の方がはるかに大きいのではないかと思うようになった。食べる物がなくなると、今までクリンソウは食べられていなかったのに、今年は初めてクリンソウが食べられているのを発見した。コバイケイソウの新芽も食べている。シカの中にも学習したシカがいて、花と葉を除いて茎だけを食べている。沢筋にポツポツ咲いているクリンソウはあまり食べていないが、群生地が見事にやられていた。今はクリンソウが増えているが、そのうち減っていくのではないか。

ヤマシヤクヤクから始まったが、山の中の植生が非常に単純化してきて、さらには土が流れて、鮎釣りをしている人によれば最近、水が非常に濁っている」という。まさしくシカの食害が、生物の多様性だけではなく、土砂の崩壊にもつながっているわけである。新しい道ができて、そこへ人が集中すると、昔の道がなかなか踏まれなくなる。そういうと



ころに入ると、シカが斜面を上り下りするの
で、細く谷筋にあった道は崩れ去っている。
廃道寸前の道がたくさん出てきた。

今年は遅くまで雪がたくさん降ったので、
谷筋で多くのシカが死んでいたのを見た人が
いる。私も、稜線でシカが何頭も死んでいる
のを見た。今までは、積雪が非常に少なくな
ってシカが増えてきたということだと思いが、
シカを減らすためには、自然に雪がたくさん
降れば、バランスがとれてくるのではないか。
しかし、我々にはどうしようもない。また、
猟師の人に聞くと、地域によって、シカ一頭
獲っても値段が違うらしい。美山町はシカ肉
を売り出そうということで大々的にやっつい
るようだが、シカの被害にどう一律に対応し
ていくのかは難しい。ヤマシヤクヤクの件に
ついては、まとめて報告したいと考えている。
また、京都支部では、自然観察会というこ
とで、地形とか地質の観察会をこれから年に
一回行おうということになっている。

五十周年を迎える支部の自然保護活動

東海支部（箕浦靖夫） 東海支部は非常に大
所帯で、支部員が約二百五十名、支部員にま
だなれない人が約二百五十名いる。その中で
自然保護委員は二十一名しかいないので、こ
れから自然保護を進めていく上で委員会を持

ち合っていかなければならないと思っている。
委員会の主な活動としては、①七年前に猿
投の森づくりということ、愛知県の東にある
猿投の森を県から借りて始めたことが、ど
うにか軌道に乗っているところである。その
森をもとに、②昨年、名古屋でCOP10が開
かれた時に六回ほど、講演会（一般の方百名
に限定）と現地での観察会（同三十名限定）
を行った。③協同の活動としては、京都と関
西の両支部のご協力を得て、森の勉強会を共
催という形でやっている。今年は、尾鷲市の
速水林業の環境林・人工林で開催予定である
（定員三十名）。広範囲の方に参加していただ
いて、同じ仲間として勉強会をしたい。

その他、東海支部は愛知県と三重県の二県
の加入支部員から成るが、愛知県東側と三重
県南西部以外には山がない。ほとんどの会員
が他県の山に行ってお世話になっている。そ
ういう方々にどのように自然保護の必要性を
説いていくかということが委員会でいつも議
論になるが、なかなかいい知恵が浮かばない。

岐阜県、静岡県、静岡県の支部
の方で、いろいろ勉強
されているようなので、
私どもも参加させてい
ただいて、今後、そう
いう方面を活発化して



自然保護に努めていきたい。今年、東海支部
は五十周年になる。十一月に記念式典と親睦
を企画しているので、ぜひお出かけいただき、
紅葉の猿投の森も見えていただきたい。

山岳レインジャー活動と山岳トイレ問題
山梨支部（里見清子） 『木の目草の芽』第
九十二号の支部報告「山梨県の自然保護活動
について」（磯野澄也）のとおりである。

少ない予算の自然保護活動

越後支部（桜井昭吉） 越後支部はもともと
自然保護委員会があつたが、昨年、少し強化
して五人体制で再スタートした。しかし、残
念ながら少ない予算で自然保護委員会に何が
できるかを検討したが、お金を使わないでや
れること、それはまず身近な清掃登山から始
めることではないかということで、支部の行
事である登山の際に清掃活動を行い、さらに
自然保護委員会を含めた支部員が各地域の清掃
登山に積極的に参加するという取り組みをや
ってきた。昨年は、五回ほど実施したが、そ
の他、県山協が自然保護の行事をいっぱいや
っているの、それに積極的に参加しようとい
うことでスタートしている。これからは、
もつともつと別のことを考えて積極的に取り
組んでいかなければならないと思っている。

大震災三ヶ月目、福島県の現状

福島支部（高田雅雄） 福島は、三月十一日

の大震災から今日でちょうど三ヶ月になるが、まだまだ地震による避難者が多数おり、それにもまして住民が原発事故による見えない放射能の拡散におびえているという状況にある。現在、震災による死者は福島では千五百人弱、行方不明者が四百人ほどいる。浜通りの被害が大きかったが、現在は原発の関係で放射能を恐れて中通りでも会津の方へ避難したり、全国に散らばったりしているという状況になっている。十二日に原発の水素爆発があつて、その時の風向きによって放射能が飛散した。東北自動車道の走っている方向（福島市の方向）に対して放射能のレベルが高く出ている。今、その方面の方々が計画避難地域というところで全国の町々に避難されている。最近もまた、スポット的に高い地域の人たちを避難させなければならぬという話が出てきている。現在、地域の行政というものが立ち行かない状況にある。各避難した場所に行政が移っているの、行政が避難した人を集約するのが大変難しい状態にあり、苦労している。各行政の選挙もまだ実施されない状態である。七月頃から各市町村議員選挙等が始まってくるが、それも大変な状況になるのではないかと。その見えない放射能の関係では、最近、山

の方の放射能のレベルはどうなのかということ、四月末頃からの残雪時の放射能レベルが少し出た。行政の方から私の方に、放射能のレベルを計りたいので山に行くなら雪をちよつと採つてきてほしいという話があつたが、なかなか難しいところがあり、進んでいない。現在は、学校の方が、校庭の放射能レベルが高いということで問題になっている状況である。文科省の方で年間一ミリシーベルトまでということになって、それを三百六十五日で割ると、学校の野外活動は一日二時間四十分。登下校の時間を考えると、学校での屋外の授業時間が二時間弱という状態になってしまう。そのため、野外活動が大部分なくなつてきた。私たちのところには国立那須甲子青少年自然の家がある。そこにも避難者がおり、七月までは受け入れ中止になっているが、それ以降の学校側の受け入れはみんなキャンセルになつてきた。放射能に対する風評ということ、恐れて福島県には来ないという状態が始まっている。田部井さんが福島県の山に行こうというところで『山』五月号に書かれているが、山の方にも放射能の影響が出てきている。人が集まると、必ず放射能の話ということになってしまう。川の魚や野菜に対しても、セシウムが出てきているということで摂取制限などの問題があつて、見えないものは恐ろしい。

私たち福島支部としては、今日、埼玉支部の方々が安達太良山に登るということ、田部井さんが一緒にすることになっていて、福島支部も応援に行っている。風評被害を払拭して頑張ろうということ、私のいる地元の西郷村でも、野鳥の会の会長である柳生博さんが来て、地元の野菜を使って料理して食べさせるという話や、国立公園内に行つて野鳥観察会をするという話が出てきている。元気づけるためにいろいろな催しをやっていたたいている。私は十八日に、スカイラインの方の裸地化した場所に植生を戻そうということで、近くのスキー場から植物の種を採つて蒔く作業をするになつてきている。支部としては「山の日」の関連で、「山を大切にしましょう」というチラシを作り、安達太良山の山開きに参加者に配つた。また、私の近くでは、昨年も報告したように、那須御用邸の中に「平成の森」が開園した。現在、人がたくさん来ているが、栃木県の方も放射能が高いという話が出てきている。そういうことで福島県の方では、原発が収束しない限りは、落ち着いた生活ができない状況にある。



広域での多方面にわたる自然保護活動

北海道支部（武田一生） 北海道では、①毎年、自然保護集会を実施し、それに基づいて行事をおこなっている。

それとはまた別に、②山仲間、自然保護団体、山草会等の二十三団体が集まって登山道・植生・盗掘の状況等を調査したり、修復したりしている「北海道高山植物保護ネット」がある。今から十年前に夕張岳が天然記念物に指定され、その翌年に大量の高山植物が盗掘された問題を契機に発足したもので、北海道庁と一緒に活動を行っている。私たちも、昨年は自然保護研修会というのを持ち、北海道庁自然保護課から委託されて、六月一日から九月末まで、大雪山系、十勝連山等の盗掘防止パトロールを実施した。延べ百五十二回、三十二名の会員が参加して行われた。盗掘の跡、踏跡がないか等の他に、一昨年あたりからエゾシカの状況についても調査票に書き、道の方に十月に報告している。

他の支部同様に、北海道も知床ではエゾシカの被害がひどく、木の皮が食べられて山の木が真っ白になっている。そして、シカの数が非常に増えている。北海道のシカは利口で、私有地に入って農作物を荒らしていたが、駆除に入ると、我々一般の人や農家の人が入り込めない国有林鳥獣保護区域に逃げ込み、国

有林の中も相当荒らされている状況である。

以上のことを、十月の初めに報告している。道に委託された活動としては他に、③上川・十勝振興局の職員と一緒に官民合同のパトロールを実施している。北海道支部の会員も参加している。北海道は広いので、支部自然保護委員を道東・道北・道央・道南の四グループに分けて二名ずつ配置して、今年は四十名がパトロールをやるうとしている。

他の各団体の行事への参加では、④幌尻山荘の排泄物の搬出作業にも、七、八年前に実施した段階から加わって行っている。幌尻岳は日本百名山の一つで、三、四年前にバイオトイレを設置したが、それだけでは全然追いつかない状況で、応援という形で、毎年三回、七月、八月、九月に一回ずつ搬出行事に参加している。搬出の方法は、ナイロン袋に排泄物を五リットルくらい詰めて一斗缶に入れて運ぶ。この幌尻岳は

山荘まで行くのに林道二時間、渡渉二時間かかる難路である。毎年、渡渉の際に登山者が亡くなっているような場所で、会員や有志の方は命がけで運搬作業に携わ



っている。⑤「山のトイレを考える会」では、パンフレットを作成して、山のトイレをどうしたらよいか、山で使ったちり紙は必ず持ち帰るようにと一言添えて、パンフレットを配布する活動をしている。⑥「山の道を考える会」でも有志が集まって、昨年は五十名ほどが三人一組になって、笹を刈る人、笹を集める人、食事班に分かれて一泊二日で札幌岳・空沼岳の縦走の笹刈りをし、北海道支部からも六名ほどが参加した。また、⑦七、八年前に台風十八号で支笏湖周辺の森が広範囲にわたって木がなぎ倒されることがあって、森づくりの有志の方が植林活動、下草刈り等の活動に春、秋を通じて参加している。

以上について、昨年もやっているし、今年もぜひやろうと考えている。六月七日に道の職員を交えて研修会を開き、これから実行に移していく段階である。

なお、支部報告の最後に、自然保護委員下野綾子氏から「過去の記録としての山岳写真の活用について」、その目的や実施体制等の概要説明がなされ、意見交換が行われた。

埼玉支部・信濃支部・山梨支部については、『木の目草の芽』第九十二号に報告記事が掲載されているので参照されたい。

（記録・山本敏子）